2. 放射線診療４団体連絡協議会の活動を通じて考えたこと
── 放射線科医の立場から遠望②

山田　　惠　日本放射線科専門医会・医会理事長

2023年の本誌上で同じ放射線診療４団体連絡協議会（以下，４団体）に関する特集がありましたが，その時に述べたことを少々おさらいしておきたいと思います[1]。第１点目としては，日本の診療放射線技師にも一段上のレベルの資格が必要だということを述べました。特に，水面下で進んでいるナース・プラクティショナーの制度化を念頭に置く必要があります。第２点目としては，排他的な立場は可能なかぎり回避するのが得策であるということを述べました。競合する集団同士で足の引っ張り合いをすることが，業界の発展と社会貢献を阻害しています。具体的な事例を挙げれば，やや古い話にはなりますが，50年ほど前に専門医制度が発足した当時，医師会はそれに対して全面的に反対しました。今となっては，その動きはほぼ忘れ去られているように見えますが，その名残は存在します＊1。

KISS principle（腹芸は歓迎されない）

「そもそも論」で語れば，どのような人にも排他的な側面が存在します。生き物が生存するには食料確保が必要ですから，そういう観点から縄張りが必要です。そうすると，排他性というものはごく自然な現象かもしれません。そのため，個人や団体の間で対立構造（あるいは競合）が生じてしまうのも理解可能です。一方で，論理的思考ができる一群の人たちは，社会をまったく異なる角度から眺めています。それは「いがみあうよりも協力しあう方がよっぽど生産的だ」という視点です。そして，もしも協力体制を築くのであれば，何事も基本姿勢は「シンプルかつストレート・フォワード」という立脚点を持つべきです＊2。これまで４団体が自然に協力関係を築けたのも，そういった基本路線が共通していたということが背景因子にあったと思います。

われわれ日本人は，とかく腹芸（ハラゲイ）を使うことを日常茶飯事としています。面従腹背という言葉がありますが，それが社会人の行動様式として歴然とした市民権を有します。日本人はハッキリと物を言いませんので，表立った対立的な議論は滅多に生じません。付け加えて言えば，明確な意思表明をした結果，排斥の憂き目にあうことすらあります。そういった被害を避けるために，多くの人が意見を表明することを差し控えて，人の見ていない所で反対の行動をすることになります。

ハラゲイを得意とする日本人とは対照的に，西洋文化の中では考えや意見を表だって意思表明する，ということが幼少時から求められます。そして，意見が合わない人がいても，その人を攻撃したり排斥したりすることはありません。排斥してしまうと未来永劫，その人物からの建設的な意見を引き出すことは不可能になるからです。そして何よりも重要なのは，反対意見を述べた人も，いったん方針が決まればそれに従う必要があるという点です。逆に言うと，日本流の「組織に所属したまま面従腹背すること」は西洋社会では通用しません。

私見ですが，この面従腹背という文化が日本の社会を複雑化させ，結果として停滞させている可能性があります。例えばギャラップ社の調査で「自身が所属する会社へのエンゲージメントの度合」をランキングしたデータを見ると，日本は調査対象国139か国中132番目です[2]。平均すると，わずか6％の従業員しか職場に対して積極性や熱意を持っていない，ということのようです。世界平均が23％ですので，この数字を大きく下回っています。この状態で組織が存続していること自体が驚異的ですが，そこは日本人持ち前の勤勉さ（真面目さ）が辛うじて支えとなっているのでしょう。幸いな

＊1 画像診断管理加算に残る「10年ルール」はその片鱗であり，専門医ではなくても保険点数が請求できるように「抜け穴」として機能しています。
＊2 Keep it Simple and Stupid あるいは Keep it Simple and Straightforward といった言い方がされ KISS principle と称されます。

〈0913-8919/25/￥300/論文/JCOPY〉